

著名な卒業生②

〈特集〉

中学第11、20回卒業生

この時期の第11回生が入学したのは明治四十年（一九〇七）四月、卒業は同四十五年三月、第20回生の入学は大正五年（一九一六）四月、卒業は同十年（一九二一）三月。日露戦争後の日本の資本主義確立期で、第一次世界大戦を挟む時期であった。

全国的にも経済情勢の進展等もあって、中学校への進学率の著しい向上がみられた。この地方もその例外ではなかったが、太田中学では入学定員は開校当時と同じ百名のままであった。志願者はしば

らくは定員を若干上まわる位であったが、第11回生の受験した明治四十年頃には一・五倍前後となり、第18回生の受験した大正三年にはついに二・一倍に達し、以後二百名を大きく上まわり、県下でも最難関の部類になった。やがて群馬県会でも問題となり、本島自柳議員の大活躍もあって、大正七年（一九一八）の入試より一学級

増定員百五十名となったが、その恩恵を受けるのは、次回で扱う第22回生からである。

また近隣の県立中学、館林中・桐生中・足利中が開校されるのは、大正十年であったから（桐生中は町立としては大正六年）、この時期は東毛一円、さらには栃木県足利周辺から多くの俊英が太田に集うたのである。

前回同様、筆者の独断による筆の運びをお許し頂きたいが、「著名」ということにこだわらずに、ユニークな生き方をした人も登場させよ、との声もあったので、若干そうした面も加味した。

中央政界

国務大臣を歴任したということではない、この項の最初に挙げるべきは大屋晋三氏（11回）であるが、氏はもともと実業界における第一人者であった。氏は邑楽郡佐貫村（現明和町）に生まれ、小学

校長を務めた父親の転勤に伴い、邑楽郡下を移り住んだ。はじめ前橋に寄宿して前橋中学に二年通い、三年は太田中学邑楽分校、四・五年は太田の本校に通った。

小学校の代用教員を一年務めた後、東京高等商業学校（現一橋大学）に進み、卒業後は新興総合商社の鈴木商店に入り、やがて請われて帝国人絹に入社し、終生の事業となった化学繊維工業の道に踏み込んだ。終戦直後の昭和二十年十一月に同社の社長に就任し、戦後日本経済の重要な一翼を担う化学繊維界で重要な地位を占めた。

昭和二十二年の参議院議員選挙に出馬、当選し、翌年には第二次吉田茂内閣の商工大臣（一時は大蔵大臣も兼任）、さらに第三次吉田内閣の運輸大臣を歴任し、昭和二十五年六月まで閣僚の座にあった。その後社務に復帰して再び帝人社長となり、昭和五十五年に逝去されるまで社の第一線にあった。母校に寄せる思いも強く、昭和二十四年に来校・講演され、昭和五十二年の創立八十周年記念事業には名誉総裁として多大の貢献をされ、この時も講演をして後輩

たちを鼓舞された。

大屋氏と同級でほかに二人国會議員となった人がある。一人は野本品吉氏（11回）。新田郡尾島町正田家の生まれで、太中から群馬師範本科第二部に進み、卒業後三十三年間教職にあった。この間、宝泉村（現太田市）野本家に入婿し、各地の小学校長、県視学を歴任し、昭和二十年八月に太田青年学校長となった。翌二十一年四月の戦後第一回の参議院議員選挙に出馬した。全県一区、二名連記という制度の中で最高点で当選した。衆議院議員をもう一期務めた後、昭和二十八年より四十年にかけ、参議院議員（全国区）を二期務めた。その間、法務政務次官等を歴任した。

もう一人は増田連也氏（11回）。邑楽郡伊奈良村（現板倉町）に生まれ、太田中学邑楽分校から太田の本校、さらに第四高等学校（金沢大学の前身）に学んだ。邑楽分校の廃止（明治四十五年四月、館林農業学校に移行）を非常に惜しみ、旧分校出身者の諸氏と共に中学復活のため熱心に運動し、やがてそれが館林中学の創設として結



昭和24年10月1日 大屋晋三氏来校時。右より大屋氏・新井金次郎校長・増田連也氏

実した。氏は記者生活の後、昭和十年より連続三期十四年にわたって県会議員となり、その間九年間正副議長を務めた。昭和二十四年に衆議院議員に当選、熱血漢ぶりとひげの風貌で人気があった。

なお前記三氏と同級であったが三年生の時、家庭の事情で心ならずも退学した人に須永好氏がいる。氏は小作争議、農民運動の卓越な指導者として有名で、「無産強戸村」を成立させ、戦前の昭和十二年に衆議院議員となり社会大衆党に属したが、戦後の昭和二十一年に日本農民組合の組合長となり、同年の衆議院議員選挙に社会党から出て当選した。同年九月の国会

で農地改革法案の質問演説中に倒れ、間もなく逝去した。同氏を入れて数えれば、一学年から四人の国會議員を出したことになる。

さらに国會議員となった人を挙げれば、境野清雄氏（17回）がいる。氏は桐生の輸出織物買継商の家に生まれ、太中より早稲田大学商学部に進み、卒業後は家業に従事し、また桐生絹人絹織物配給常務取締役、群馬輸出織物社長、桐生商工会議所会頭等を歴任した。昭和二十二年参議院議員補欠選挙で日本民主党より出て当選し、参議院経済安定委員長を務めた。氏はそうした実業界・政界における活躍のほか、スポーツ界での尽

力で知られる。柔道・軟式テニス・ラグビー等で活躍し、殊に柔道は戦前より造士館道場を経営し、戦後は県柔道連盟結成の中心のメンバーの一人であった。

飯島祐之氏（19回）は邑楽郡多々良村（現館林市）の農家の生まれ。太中卒業後は家業を見るかたわら、多々良村長・県町村長会副会長のほか、村・郡・県の各種農業団体・農産加工業団体等の要職を歴任した。昭和二十一年四月の衆議院議員選挙では日本進歩党から出て当選し、同党の政調会副会長などを務めた。

木村寅太郎氏（20回）は新田郡笠懸村（現笠懸町）の人。太中から東京帝大農業実科を卒え、県農会技師となり、農業振興、農業近代化の指導者として活躍した。昭和十四年群馬県会議員、つづいて同十七年より衆議院議員となり、笠懸村長を兼任するという中央・地方を通じての政治家であった。戦後は県産野菜の販路開拓、出荷調整に尽力し、笠懸村長にも再選されたが、任期途中の昭和四十七年に病没した。

実業界



中島乙未平氏

中島飛行機の創業者、尾島町出身の中島知久平は、弟たちを社業の幹部としたが三弟の中島乙未平氏（12回）は太中から東北帝大工学に進んだエンジニアであった。外国技術の吸収・導入を重視した知久平は乙未平氏を大正十年から六年間の長きにわたりフランスに駐在させた。氏が吸収・収集した技術・情報や帰国の際に帯同したフランス人技術者のその後の中島飛行機の発展に対する貢献度は大きかった。昭和六年、合資会社中島飛行機製作所は事業体制の強化のため中島飛行機株式会社に改組したが、氏はその常務取締役となり、さらに昭和十二年には副社長に就任した。

昭和二十年八月の終戦直後、旧中島の事業整理と民需産業への転換のため富士産業株式会社となったが、氏はその社長に就任し、翌

年七月までその職にあった。その後昭和二十九年より五十八年逝去までの間、富士重工業(株)の取締役・相談役の座にあった。

戦後日本の鉄鋼産業の基礎を築いた人といわれる森田恵三郎氏(13回)は、邑楽郡赤羽村(現館林市)の生まれで、邑楽分校、太田の本校では秀才の誉れ高かったが、五年生の時の弁論大会では、「社会主義の真髓」と題する演説を行い担任の先生に演壇から引きずりおろされたというエピソードを残している。第二高等学校から東京帝大法学部に進み、卒業後は三井物産、官営八幡製鉄所、特許局を経て、昭和九年に合同直後の日本製鉄(株)に入り、取締役等の要職を歴任した。戦後の昭和二十一年には日鉄鉱業(株)の社長に就任し同三十八年まで在職、国内・海外の鉱山開発に力を注ぎ、その後の日本の鉄鋼業発展の基礎を築いた。かたわら日経連等の財界諸団



森田恵三郎氏

体の役員を数多く歴任した。氏は大変な読書家で、考え方の幅も広く、掘った山には必ず植林するなどを律儀に実行した人として知られる。

灘の銘酒づくりで知られた同窓生もいる。木暮保五郎氏(16回)は新田郡強戸村(現太田市)の出身であるが、当時日本で唯一の醸造科のあった大阪高等工業学校を卒業し、神戸市灘にある酒造会社菊正宗本社に入社した。昭和十六年から戦後にかけて技師長を務め、常務取締役に就任した。昭和二十三年昭和天皇来社のおり、親しく案内、説明したことなどが記憶に残ると語っている。同氏は長らく同窓会関西支部長を務め、後輩たちの面倒をみた。

同窓生で中島飛行機ないし富士重工業で活躍した人は数多いが、藤生富三氏(17回)もその一人である。氏は慶応大学に学び、やがて中島飛行機に入社した。戦後の



藤生富三氏

昭和二十八年七月、富士産業の第二会社十二社中五社により富士重工業(株)が設立されたが、その時氏は取締役となり、同三十年には正式に合併し、氏は常務取締役となり同三十三年までその任にあった。その間同三十一年から翌年にかけて小型自動車部の責任者であった。当時は四輪自動車の製造販売は行われておらず、小型自動車というのは富士産業・富士工業以来のスクーター(ラビット)で、一世を風靡した富士重工業の花形商品であった。氏はその後昭和三十五年から三十八年にかけて同社相談役を務めた。

また島田英一氏(19回)は、東京外国語学校(現東京外国語大)を出て実業界に入り、日本興業銀行の常務取締役にになった。同行は戦前は工業金融の特殊銀行、戦後は長期信用銀行の一つとして知られる。さらに日東紡績(株)の社長として業界に大きな地歩を占めた。本校同窓会東京支部、京浜同窓会を通じての功労者の一人である。

地方政界

市町村等の首長や議員などとし



成田作兵衛氏



田島宗仁氏

て活動した同窓生は枚挙にいとまないほどであるが、ここでは太田市長を務めた二氏について記す。

田島宗仁氏(13回)は旧荻川村茂木家に生まれ、高林の田島家に入った人。群馬師範学校本科第二部を卒業後、県内小学校・青年学校等の教員・校長を務め、市の教育課長・市教育長を歴任し、教育界内外からの信望厚い人であった。教育長在任中の昭和三十四年六月市長候補に推され、当選して第六代市長となり、四期十六年、同五十年六月までの長期にわたり在任した。おりからの高度経済成長政策、首都圏整備計画の潮流を活用し、地域の工業化、都市開発の推進に当たった。昭和五十二年には太田市名誉市民の第一号に推

挙された。

成田作兵衛氏(15回)は旧太田町の商家に生まれ、昭和二十二年四月、初の公選太田町長に選出され、市制施行を推進し、翌年五月その実現と共にそのまま初代太田市長に就任、同年十二月までその任に在った。その間、進駐軍との交渉、産業の復興、農地改革など多端な市政執行に当たった。同氏はその後昭和二十六年に県議会議員に当選し、一期を務めた。

教育界

教育界でも活躍した人士は数多い。野本品吉氏、田島宗仁氏については既述のとおりだが、教育界一筋の代表格を挙げるとすれば、母校第十代校長の飯田与惣雄氏(15回)であろうか。氏は新田郡九合村(現太田市)の出身、群馬師範学校を卒業して小学校訓導になった後、広島高等師範学校第二臨時教員養成所を卒えて県下中等学



飯田与惣雄氏

校教諭・校長を歴任し、昭和二十五年八月に太田女子高校校長から本校校長に就任した。第五代湯沢徳治校長以来の同窓校長で、昭和三十三年三月まで実に七年七か月の長きにわたって在任した。その間校舎の全面改築事業を推進し、昭和二十五年から三十一年まで七期にわたって大工事を完遂させ、昭和三十三年十月の創立六十周年並校舎改築落成記念式典は盛大に挙行されたのである。

そのほか小・中・高校の校長等として教育界において大成された人は少なくない。丸山象吾氏(15回)は栃木県山辺村(現足利市)の出身。同村から氏を含めて四人、足利町から六人の同級生がいて、一大勢力だったという。東京高等師範学校を卒えて中学校・高等女学校の教師となり、埼玉県立鴻巣高校長などを歴任し、退職後は足利に戻って足利学園の校長・名誉校長を務めた。『九十年史』には明治末年から大正初めにかけての太中生活、開通後間もない東武線での汽車通学、明治天皇崩御の際の動きなどにつき、詳しい話を書いて下さった。

この時期の卒業生には、大学教授として名を成した人も多い。幾人かのお名前を挙げるにとどめて失礼するが、森高次郎氏(14回)は東京帝大農学部出身、東京大学名誉教授となった。栗原藤七郎氏(18回)は同じく東京帝大農学部卒業、東京農業大学名誉教授であった。森戸太郎氏(20回)は京都帝大経済学部・東京帝大法学部卒業、法政大学名誉教授となった。

最後にユニークな詩人教育者を紹介したい。清水房之丞氏(20回)は群馬師範本科第二部を卒業後、小学校教員・校長を歴任したが、詩人として著名であった。すでに中学在学中から詩を書いていたが、佐藤惣之助主宰の『詩の家』に参加、昭和五年に詩集『霜害警報』を発刊し、独自の詩風で注目された。その後も詩誌の創刊編集や詩集の刊行をつづけたが、昭和三十九年交通事故のため惜しくも六十一歳で他界された。太田近辺の小・中学校などで同氏作詞になる校歌を持つところも少なくない。

刀圭界

医学を修め、医学者・開業医・

軍医などになった人はかなり多く、毎回数人ずついるが、ユニークさという点で前原勝樹氏(20回)を挙げる。氏は桐生町の天満宮の杜司の家に生まれ、東武鉄道桐生線が通るようになって間もない大正五年に太中に入ったが、桐生から入学した生徒は十数名いたという。氏は柔・剣道や軍事教練に反発を感じ、金山麓に中島飛行機研究所が移転したことは自然・景観の破壊につながるとした言動を示すなど、大正デモクラシーの時勢に敏感に反応していた。医師を志し、京都帝大医学部大学院を出て内科医となり、一時は軍医となった。戦後は結核撲滅に奮闘し、かたわらユネスコ活動を熱心に進め、ユネスコの県会長、全国の副会長となり、桐生ロータリーの会長等を務めるなど多彩な活動を続けた。

(高7回 正田 安司)
(次回(第18号)では中学第21、30回卒業生の予定。ご要望・ご意見等がありましたら、事務局あてご連絡下さい。)